



忠臣藏皮肉論  
上

2.024  
1-3  
13  
45





春のちびとみお當より一番とらう。ちびとらう處  
 が是れ。巴が作も何とぞ。別々頭痛のまんい  
 もたし。萬一唐んとつみとまの近世大人の鼻とも  
 多のくたりぬり殿をこ甲はありて。おのれが仕合  
 本屋のうららび。何んまりむわふをあんどずふや  
 ら小撮出せ賣出せと。去年の暮ら丸一年。二年越  
 なる今も一向まぬ紙直段。高しも兼て取  
 知の地。先五百部の製本を。たもむく陸月  
 末谷のがらる。其お其味を何とせむなら。

こころさきせーたれり。花の御江戸小名うその  
 狂歌師。奇に羅金鶴がやもれり。安政四年  
 巳乃初春。左聖廟の例おたつて。假定の  
 きりきり身を小関た。酒酒をやこりしなから。

平亭銀雜誌



柳屋碓嶺

弄の月宵より  
ふりてみゆるなり

一形をそのなり  
まやかき

胡床并椿嶺

夜珠卷千城

境をるももふ  
梅の月はいれ

窓あけ  
涼一軒の月

竹葉亭蒼吾

百細舎千魚

白方や楳のそら

雨風の目ふ

吞雀つけ酒の

冬ハ古の式

松風軒谷水

啼なまらう  
りやまらぐす

昨夜卷喜象

松亭千春

山斜やむい  
こゝろふ  
紫水仙

敵人の世を  
むさがるや

茶喰ひ

方園齋光州

明星也時雨

十時危牙廻

一瓢携瓢水

澗海の上

木の陰に滅枯る  
すくさの事

七まらひ生く

時雨もや霧も

のちよ仲



春田九皇

高瀬秋江

佐藤蕉庵

くさくさ  
合作  
のくま  
せう

大治枕山

かぐ爪醉撫

吉江昇斎

東志交

又世龍琴

吉田南陽

片山冰亭

思田龍庵

時田石齋

根岸友山



在宿五之日

平亭銀輝

春田冠子  
えんやの人  
形のせう  
どうもかん  
えで分  
針

寺門謙軒

高澤雲山

木下方外

素星鳩

小松原翠湖

澤能山

守村抱儀

宇佐美竹觀

堀田佛菴

堀田良齋



長村

真下晚高  
藤田謙齋

久世竜泉

伊藤権舟

吉田柳隱

鶴峯戊申

服部波山  
土肥柳齋



毎月十日の月  
あつた  
は  
は

小正月舟

うらやまをへたりても  
てふあはれやうもど  
るのこころを  
ません

田島益山

櫻井蓬菴

松本董仙

山本文香

山形素貞

正木龍眠

東條琴臺

福島立南

○此忠は、善の浄る程なり。國に王を昔、  
 一條形を且、臣を交、累を、の、持、合を  
 是、辨、入、見、物、の、氣、を、引、る、は、良、賢、能、と、服、を、  
 受、き、了、る、は、必、ひ、と、兼、命、を、要、と、さ、る、所、の、を、と  
 必、て、者、の、費、と、省、て、兵、同、の、休、を、と、も、  
 と、ま、さ、る、もの、也、故、に、よ、く、後、世、の、人、を、  
 實、見、延、の、元、と、ま、す、又、政、の、令、を、  
 良、良、久、

○此の二句、  
 此の二句、  
 此の二句、

生涯の一作、ふして三部及び化邦、  
 此、中、を、裁、度、も、此、在、の、初、日、  
 依、て、その、妙、能、の、一、字、の、所、  
 一、日、の、在、る、妙、の、一、字、の、所、  
 知、る、もの、又、稀、あ、る、凡、人、  
 其、方、良、一、且、の、一、日、の、  
 食、て、表、ふ、それ、知、見、せ、  
 の、事、妙、中、の、妙、ゆ、て、  
 ち、り、此、淨、當、理、よ、く、  
 切、ち、る、が、故、ふ、天、然、の、  
 妙、あ、り、て、人、の、見、  
 飽、さ、る、事













本がさうおの枝  
とまはるの文も

松の井原並にさうせんさのよ。そを報ぎしよるは  
す似て共々交めて口うさのゆふあなからさるは  
とりのせり。松志の糸あすうにとて用ひては

依傍のちひか接ひのよあくお院る。

るる松原のしりあや半将びさうくと念や揚先

の松の片多さむをさ切て精必納め

松志さよー松落けしころとあさる時以何素  
侍ふあつらふ。中系さたふ金おとあし  
文のあれバ一刀ハサリーおるるたたふゆして至

人のちいさ刀とて。接たるしころやそと  
履きて。重人の志思の移るをとありまを  
あやうにそ緒とやいん。おれとやいんは又白  
いふはうしあふ。つうお海に性賢にそ地  
りのあてこがゆふあしきるとも。人お批刺うこ  
まそはるらておびるともとあまがとら出し  
かーもまけぬ。む性たうしおが。何の返さるも  
せぎ。やたら文句ともそを信ふはるるらうの  
門人あてそまもつらふ。お海からてぬらうら  
さるあはあし。おのしりあや



つあゝゝきやく除連及次の内様娘うらやうの春こ  
まゝの御守もあれども春のこともあつたまじくしあ  
せむいせちそうの四かをたうけしてしんじうがいや  
まゝそえのちか方負せとしひひ差をまじり  
たかんの江同傍をこれうとへるいそ今日の前  
ゆかたの御守あこしもの同前そ中へ鼻毛らうらや  
きかす前か鼻毛らうまじいしんじうこれ後内へたせ  
うらひ出取を判じししそかぬのよふな内みせうある  
若と丹名の辨もあつたまじりあつた彼辨めうらびり  
及て人の丹名の内はあつたまじりあつたあつたあ  
てかたのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
それと判じあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
うらひ判じあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ







